

研究課題名	脾温存尾側脾切除術後長期経過症例における胃静脈瘤発生リスク因子の検討 -国内多施設共同研究-
研究の意義・目的	<p><b>意義</b> 脾臓は免疫機能や濾過機能を有しており、抗原認識、抗体産生や感染に対する防御機構に深く関与しています。そのため、脾臓を摘出すると重症感染症や、後々に悪性疾患を引き起こすリスクが高くなると言われています。それ故、脾体尾部に発生した良性疾患や低悪性度腫瘍に対しては脾温存尾側脾切除術が行われることが多くなりました。脾温存尾側脾切除術では、脾動静脈を温存する術式と切離する術式があります。脾動静脈切離する術式は手術手技が容易であることがメリットですが、脾静脈切離に伴う胃静脈瘤を引き起こすことがあります。また、脾静脈温存は胃静脈瘤の発生リスクが軽減するとされていますが、手術手技が煩雑で、時に脾静脈血栓を起こすことがあり、それに伴い胃静脈瘤を起こすことがあります。胃静脈瘤は消化管出血の原因となり得ますが、脾温存尾側脾切除術症例を長期にフォローした大規模な症例集積報告はなく、長期的な胃静脈瘤発生のリスク因子に関しては明らかではありません。</p> <p><b>目的</b> そこで、本研究では、脾温存尾側脾切除術長期経過症例における胃静脈瘤発生と臨床病理学的因子との関連性について検討します。この研究により、脾温存尾側脾切除術症例における周術期の長期的な安全対策が可能になると考えます。</p>
研究を行う期間	研究機関の長の研究実施許可日 ~ 2023年12月31日
研究協力をお願いしたい方(対象者)	西暦2011年1月1日から2018年12月31日までに、大阪市立大学医学部附属病院肝胆脾外科、消化器外科において脾温存尾側脾切除術を施行された方
協力をお願いしたい内容と研究に使わせていただく試料・情報等の項目	<p>診療の過程で得られた下記項目を本研究に使用させてください。</p> <p>診療情報等： 患者背景：手術時年齢、性別、手術日、疾患名、身長、体重、随伴疾患の有無、術前抗凝固/抗血小板薬内服の有無 手術因子：手術アプローチ、手術時間、出血量、リンパ節郭清の程度、脈管温存の有無、標本切離長 術後合併症：脾液瘻、腹腔内膿瘍、胃内容排泄遅延、術後出血、その他合併症、再手術の有無 血液検査所見（術前、術後3年目、術後5年目）：ヘモグロビン、白血球数、血小板数、総タンパク、アルブミン、AST、ALT、総ビリルビン 消化管出血の有無（術後1年目まで、術後3年目まで、術後5年目まで） 脾臓摘出の有無、脾臓摘出施行日、脾臓摘出の理由 画像所見（術前、術後1年目、術後3年目、術後5年目）：血管開存性、胃壁外血管径、胃壁内血管径、脾梗塞 Grade、内視鏡検査での血管拡張の有無 生存転帰：腫瘍再発の有無、最終生存確認日、生死、死因</p>
試料・情報の他機関への提供	特定の個人を識別できない形で、共同研究機関滋賀医科大学外科学講座に頂いた情報を提供します。
この研究を行	別紙を参照してください。

っている共同 研究機関	
試料・情報を 管理する責任 者	滋賀医科大学 外科学講座 研究代表者： 谷眞至 大阪公立大学大学院医学研究科 肝胆膵外科学 研究責任者： 天野良亮
本研究の 利益相反	利益相反の状況については大阪公立大学利益相反マネジメント委員会に報告し、その指示を受けて適切に管理します。 本研究に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。
研究に協力を したくない 場合	下記に連絡することでいつでも本研究への協力を拒否することができます。また、研究への協力を断っても、診療に関する不利益等を受けることはありません。
連絡先	大阪公立大学大学院医学研究科 肝胆膵外科学 (担当者氏名)天野 良亮 電話番号:(06)6645 3841 メールアドレス:ryo.amano@omu.ac.jp